まだ見ぬ故郷

(下)

長部日出雄

まだ見ぬ故郷 (下)

長部日出雄

江苏工业学院图书馆
藏书章

毎日新聞社

まだ見ぬ故郷（下）

一九九一年八月五日　印刷
一九九一年八月二〇日　発行

著者　長部日出雄

編集人　深瀬正頼

発行人　戸田栄輔

発行所　毎日新聞社
〒一〇〇-五一　東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇三　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印刷　精興社
製本　大口製本

© Hideo Osabe printed in Japan 1991
ISBN4-620-10443-4

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

まだ見ぬ故郷（下）　目次

五　新しき都（下）　5
六　天へ行く道　40
七　地上の栄光　109
八　訣別の時　197
九　果てしなき船路　301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まだ見ぬ故郷（下）

装幀　多田　進

五　新しき都（下）

家老筆頭の荒木久左衛門をはじめとする重臣をあつめた軍議の場で、村重は一同に、まずこうたずねた。

「みなはいま、荒木が窮地にあるとおもうか」

この問いにたいして、いちように痩せて頬がこけた家臣たちは、くちぐちに、

「そうはおもいませぬ」

「いささか苦しき立場にあるのはたしかなれど、やがて毛利が加勢にまいれば……」

「石山とても、いつまでもおめおめと座視はしておりますまい」

「いずれにしても、最後の勝ちは荒木のものと、きまっておりまする」

などと、それぞれ本気でそう信じこんでいる表情で答えた。

「うむ。げに頼もしき申し条、まさにそのとおりじゃ」

村重は満足げにうなずいて、話の本題に入った。

「われもまた窮地におちいったとは、すこしもおもうておらぬ。じゃが、織田のほうでは、荒木をもはや絶体絶命の窮地に追いこみ、すでに進退これ谷まれりと見て、このまま兵糧攻めをつづけておれば、

いずれ城を開いて降参するものと、高をくくっておるにちがいない。それがつけ目じゃ。そこにつけ入って、逆に織田を真の窮地に追いこむ起死回生の妙計がある」

聞き入っていた家臣の目に、希望のかがやきが生じた。じつはそれこそ、だれもが祈りをこめて待ちのぞんでいたものだった。村重は熱気と確信にみちた調子で話をつづけた。

「そもそも摂津においては、この有岡が大根城。そして池田、高槻、茨木、多田、花隈、三田、能勢、大和田が、各地の根城であった。じゃが、いまさらいうても詮ないことながら、高槻、茨木、多田、大和田は、無道にも主君にそむき、摂津を裏切って、他国者の織田に降服してしまった。右近、瀬兵衛、国満、仁左衛門らの裏切り者と、この摂津をわがもの顔に馬の蹄にかけ、おおくの僧と百姓を手にかけた暴悪非道の信長は、断じて生かしておくわけにはいかぬ」

歯ぎしりする形相になった村重の目に、涙が光り、家臣たちのあいだにも、痛憤のけはいがみなぎった。

「しかしながら、裏切りによって奪われた摂津の城を、ただちに取りもどすのは、至難といわねばならぬであろう。ならば、われらにのこされた城のみで、織田を窮地に追いこむには、どうすればよい」

睨みつけた村重の問いに、だれも声をあげる者はいなかった。

「大根城を、ふたつにすればよいのじゃ」

「……」

「むろん摂津の大根城は、この有岡城にきまっておる。織田も信じて疑うはずのないその裏をかいて、われはひそかに尼崎城にうつる。水路によって毛利とも石山とも自在に往来でき、両軍の加勢をたのめる尼崎をもうひとつの大根城とすれば、もっぱら有岡に目をむけている織田を、挟み撃ちにできよう。そうはおもわぬか」

村重が語りおわったあと、身じろぎもせず凝然としていた一座に、息をふきかえしたような活気が生まれた。

ながれが完全に澱んでしまい、すべてが膠着しきって、いわばどこにも出口のない家のなかに閉じ籠められた者が、胸の奥のふかいところで願っていたものは、なにものかによって強引に打ちやぶられた壁の穴からさしこむ明るい光と、吹きこんでくる新鮮な風であったのにちがいなかった。村重が述べた考えは、ともかくその曙光と新風を、聞く者に感じさせた。

「まさしく殿のおおせのとおり、これこそは起死回生の妙計……」

家臣のひとりが、興奮した声音で口をひらくと、それにつづいて同意する者が、つぎつぎに出た。

いま尼崎城をまもっている村重の嫡男村次が、まだ一城の主として十分な力量の持主でないのは、だれもが知っていた。

そこへ村重が行って、毛利からの来援をはやめるため、あるいは石山本願寺との連携をつよめるために、ありとあらゆる尽力をすれば、膠着した戦局におおきな変化がもたらされるのは、まずまちがいあるまい。

さらにまた、籠城中の城から主君がいなくなるということには、不安を抱かせるよりさきに、なにか頭上におおいかぶさる鬱陶しいおさえが吹きとばされる感じがして、いつのまにか家来のきもちをかるく浮き浮きとさせるききめもあったようだった。

「みなが承知であれば、われは決死の覚悟で、この城を取りかこむ敵の陣をやぶり、尼崎へまいるであろう。われが出たあとの城代は、むろん久左衛門、そちに頼みたいが、異存はあるまいな」

そう声をかけた村重に、

「ご案じめさるな。尼崎へ行かれたからは、いっさい後顧のうれいなく、ぞんぶんのお働きをしてくだ

され。われらは命にかえてこの有岡の城をまもりぬき、織田の軍勢を挟み撃ちにできるときを、お待ち申しあげておりまする」

荒木久左衛門は、胸をたたかんばかりのいきおいで答えてから、すこし調子を低めて問いかえした。

「して、殿はどれほどの軍勢を引き連れ、いかようなる手だてにて、尼崎へまいられるお考えでござる」

「軍勢はおおく連れてまいらぬ。ほんの数人の者のみで、城の東より出て……」

と、村重は説明をはじめた。

難攻不落と称され、じっさいにいまも九箇月ちかくにわたってそれを証明しつづけている有岡城でも、とりわけ惣構えの城全体が建つ段丘が、猪名川につながる低湿地に張り出したかたちの東側は、敵方からの攻撃がほぼ不可能とされていた。

村重の考えは、数人の部下とともに夜陰にまぎれ、東側の城壁の下の低湿地におりて、そこを通りぬけ、舟で猪名川を下って、尼崎へ行こうというのであった。

月の光が、ごくかすかにしか感じられない九月二日の深更に、荒木村重は伊丹有岡城を脱出した。

供のひとり乾助三郎は、背に木の箱を負っていた。なかみは、まだ碾くまえの葉を入れておく茶壺で、なみなみならぬ数寄者でもある村重が、数ある茶器のなかでいちばん大切にし、誇りにおもっていた秘蔵の名物であった。

供をする五人のなかには、このところずっと側近くに仕えている阿古もくわえられた。女性ではあったが、どんな荒馬や癖馬も自在に乗りこなし、伝え聞く木曾義仲の妾で部将でもあったという巴御前をおもわせるような、男まさりの勇敢さと、無二の忠心の持主であるのを、村重は気に入っていた。

地形の利と、闇のふかさに助けられて、脱出は成功し、村重の一行は舟で川を下って、尼崎へむかって行った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それから数日して……。

有岡城を逃げ出す者が、目立ってふえはじめた。村重の脱出は、城内の野宮砦、昆陽口砦、上臈塚砦、鵯塚砦、岸砦をまもる各軍勢に、それぞれの部将から、

――殿は、毛利の加勢を一日もはやく呼びよせて、織田の軍勢を挟み撃ちにするために、尼崎城へむかわれた。

と告げられたのだが、出て行くときに、秘蔵の茶壺を乾助三郎に負わせ、近ごろ寵愛いちじるしい阿古をともなったのが伝わると、

――それはいくさの支度ではない。殿は逃げたのだ。

血相を変えて、そういう者がでてきた。

村重としては、名物の茶壺は毛利へ援軍をたのむさい、使者に託して贈り物にするつもりであったのかもしれないし、馬の乗り手として抜群の阿古は、なにかのときにほかの男よりも頼りになる、と考えていたのかもわからない。

だが、殿は逃げたらしい、という噂は、たちまち城内を駆けめぐって、長い籠城に耐えてきた軍勢を、かなり浮き足だたせずにはおかなかった。

高山右近にしたがって、深田の砦にいた能勢弥介は、有岡城からの逃亡が目立つ、と聞いて、部下を引きつれ、荒木の落武者の探索に出かけた。

城内にいる右近の嫡男と妹と、父飛騨守の運命が、その後どうなっていたかを知りたいからであった。

長い籠城で餓えた落武者は、なにをするよりもさきに、目についた百姓の家に押し入り、食物をうばってむしゃぶりつこうとするに相違ない。

案の定、一軒の百姓家で、目のいろを変えて食物をさがしまわっている落武者たちを見つけた。

憔悴しきった顔に、はげしい恐怖をあらわにして、刀や槍をかまえた相手に、弥介は油断なく近づいて行きながら、声をかけた。

「うろたえるな。命を取ろうとはいわぬ。ただ話を聞かせてもらいたいのだ」

佩刀の柄に手もかけず、しかも恐れげもなく近よるのを見て、相手はなかば抵抗をあきらめたようすで、刀と槍をおろしかけた。

弥介は、背後の部下を呼び、用意してきた握り飯の包みをほどくように命じてから、落武者たちにむかっていった。

「長きあいだの籠城、ご苦労でござった。われもおなじ摂津衆じゃ。高槻の者で能勢弥介と申す。高槻と聞けば、伊丹のおぬしらには、さぞ腹に据えかねるところもあろう。しかし高槻が城を開いて、織田方についたのには、有岡に籠もったおぬしらが知らぬさまざまな仔細もあったのじゃ。それはあとで語るとして、わが殿高山右近が有岡に差し出したる質子(しちこ)と、高山飛騨守殿の命に、別状ないかどうかを教えてくれぬか。そのまえにこのむすびにて、とりあえず腹ごしらえをなされよ。かさねて申すが、長きあいだの籠城、忠勇無双をもって鳴る伊丹の衆でのうてはとてもかなわぬこと、まことにご苦労でござった」

部下が手渡した握り飯を受けとった頭株のひとりが、目を赤くし、のどを詰まらせた声でそれにこたえ、

「高槻よりの質子と、高山飛騨守殿は無事でござる。そこにいたるまでのいきさつを申せば……」

と語りかけたのを制して、

「無事と聞けば、われらはまず一安心。腹ごしらえを済まされてのち、ゆっくりと教えてくだされ」

弥介は自分から腰をおろして、あぐらをかいた。

はじめは武士らしく構えた手つきで握り飯を口にはこんだものの、しだいに歯をなくした老爺のように必死の面持ではげしく顎をうごかす食い方になり、たちまちのうちに一箇を腹中におさめてから、相手はやっと人心地がついたようすで話しだした。

高槻の質子は、有岡城の門前において磔にせよ、という声も高かったのを、荒木村重がおさえて、ひとまず命がまもられた。

当初、人質のあつかいで幽閉されていた高山飛驒守は、やがて籠城が長びくにつれ、かつては一城の主であった力量と、いまやだれにも負けぬ織田への敵愾心のつよさを買われて、軍勢をあずけられ、部将として城のまもりについた。それで右近の子と妹の命は、より安泰になった。

こんど村重が尼崎に行ったのを、自分たちは逃げたと見て、主君のいない城にはおれぬ、と出てきたが、城内にはまだ、殿は援軍とともに必ずもどってくる、と考え、最後の勝利はこちら側にある、と信ずる武将がかなりいて、高山飛驒守はそのなかの、もっとも有力で強硬なひとりである……というのであった。

――とすれば、まえに母御前様が案じておられたとおり、右近殿はわが子と妹のいる有岡城を攻めて、父の飛驒守殿とたたかわねばならぬことになるのではあるまいか。

弥介はそう考えて、全身にざわざわと鳥肌がたつのをおぼえずにはいられなかった。

荒木村重が、毛利の来援にのぞみをかけて、織田の軍勢に取りかこまれた有岡城を、ひそかに脱出したのが、九月の二日――。

そのほんのすこしまえに、備前と美作を領して毛利とむすんでいた宇喜多直家が、羽柴秀吉の調略におうじて、織田方に転じた。

四日に秀吉は、安土城に馳せかえって、宇喜多直家にたいする所領安堵の朱印状をもとめた。

はなはだ成果のおおきい調略に成功した手柄を、褒められるつもりで来たのにちがいないが、信長は自分のゆるしもうけず、勝手にそこまで話をまとめたのを怒って、秀吉を戦陣に追いかえした。

やり場のない鬱憤を、秀吉は、播磨の別所長治の軍勢にぶつけ、目立つ敵将を何人も討ちとる大打撃をあたえて、長いあいだ抵抗をつづけてきた三木城を、まもなく落ちるにちがいないところまで追いこんだ。

毛利にとってみれば、宇喜多直家の離反によって、織田の先陣が一気におおきさといきおいを増しながら近づいたわけで、石山本願寺と荒木村重への救援よりも、さきに自国の、

――防御。

を考えなければならない形勢にかわってきた。

有岡城より村重が出て、尼崎にうつったのは、能勢弥介が城内からの逃亡者に聞いたのとおなじような経路で、包囲する織田の各陣につたわり、じきに安土へ達した。

村重の脱出から、十日後――。

織田信忠は、有岡城を包囲していた軍勢の半数をひきいて、尼崎城にむかった。

そして城のまわりに、ふたつの砦の構築を指図して、ひとつは塩川国満、高山右近、もうひとつは中川清秀、福富秀勝、山岡景佐に、守備を命じてから、のこりの軍勢をつれて、昆陽(こや)野へ引きかえして行った。

塩川国満、高山右近、中川清秀はいずれも前年まで、荒木村重に臣従していた摂津衆である。信忠はあからさまにそうはいわなかったけれども、この名指しには、

――摂津の最後の始末は、摂津衆がみずからつけよ。

という暗黙の命令がこめられているものとおもわれた。

一方、村重のほうからすれば、だれよりもはやく織田方に寝返った塩川国満、この者だけはとおもいこんでいた信頼を手痛く裏切った高山右近、開戦をもっとも強硬にすすめた中川清秀の三人の軍勢に、城を取りかこまれたのは、気もくるわんばかりに口惜しく、死んでも死にきれぬほどに、

――無念。

きわまりないおもいであったにちがいない。

右近が父とたたかう運命になるのではないか、と不安とともに感じた能勢弥介の予想は当たらなかった。

しかし、父と子と妹がいて、自分の手がとどかない有岡城に、後髪を引かれないはずがなく、尼崎城攻めの陣につきながら、右近は悲痛な表情をかくせずにいた。

主君の荒木村重がいなくなったのにもかかわらず、すくなくとも外から見るかぎり、有岡城はいぜんとして、

――堅城。

の厳めしさときびしさを失っていなかった。

村重が脱出した直後に目立った城内からの逃亡者は、まもなく途絶え、包囲する織田の各陣からはとうぜんさまざまなつてをたどって、調略のはたらきかけがされたが、内部から呼応する者が出ないまま、一箇月以上の時がすぎた。

城内にのこったおよそ三千と推定される軍勢の、驚くべき士気と忠実さと忍耐づよさは、包囲する側に無気味な感じさえ抱かせた。

村重の脱出から四十日ほど経って、ようやく滝川一益の調略に、城内の中西新八郎がこたえた。新八

郎は、星野、山脇、隠岐、宮脇らの足軽大将を仲間にして、謀反をおこす機会の到来を待った。
有岡城では、軍勢をひきいる頭株の者の妻子を、夜は城の内郭の館に入れて、人質にしていた。
だから独り身や小身の武士と足軽は逃げだせても、妻子をもつ家臣は、こころならずも城と、
――運命。
をともにせざるをえない立場に置かれていたのだった。
だが主君がいなくなって日が経つうちに、やはり軍律がゆるんできたのだろう。自分たちの仲間の妻子が、城の内郭に閉じ籠められるのをまぬがれることができた十月十五日の夜――。
中西新八郎と数人の足軽大将は、しめしあわせていた滝川一益の軍勢を、上臈塚砦に引き入れた。
一気になだれこんだ滝川勢は、中西らの謀反組に先導されて、荒木勢と斬りむすびながら、城内の町家と侍屋敷に火をつけてまわった。
たたかいがはじまって時がすぎるにつれて、精気にあふれた滝川勢と、飢えて痩せおとろえた荒木勢との、力の差が明白になった。
はじめのうちは死物狂いで刀や槍を振りまわしても、まもなく精根つきはてて、ふらつきながら立っているのがやっとのすがたになる荒木勢を、滝川勢はつぎからつぎへと薙ぎ倒し、その猛烈ないきおいに圧倒され、とてもかなわぬと戦意を失って武器を投げすて、地にへたりこんで降参する者もふえた。
一面に火と煙の海となった家なみから、飛びだしてきた女子供は、悲鳴をあげて逃げまどい、たがいに親と子の名を呼びかわして、城の内郭へむかう道をさがし、そのなかへのがれようとしていた。
天守閣のある本丸と、二の丸をふくむ内郭は、広い内堀と堅固な城壁によってまもられていて、いわば惣構えの城のなかの、もうひとつの城であった。
かなりの軍勢と家族をのみこんで、かたく城門を閉ざした内郭から、数えきれぬほどの矢弾が、近づ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com